

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 乙第 2282 号

Descemet Stripping Automated Endothelial Keratoplasty for Bullous Keratopathy After Anterior-Posterior Radial Keratotomy

(佐藤式近視手術後の水疱性角膜症に対する角膜内皮移植術)

中谷 智 (なかに さとる)

博士 (医学)

論文審査結果の要旨

本論文は、佐藤式近視手術 (Anterior- Posterior Radial Keratotomy : APRK) 後の水疱性角膜症に対して角膜内皮移植術 (Descemet Stripping Automated Endothelial Keratoplasty : DSAEK) を行い、その術後成績を臨床記録から検討することによりその有効性を明らかにしようとした後ろ向き臨床研究論文である。

症例数は 4 例 5 眼で、患者平均年齢は 81.8 ± 7.1 歳、術後平均経過観察期間は 19.8 ± 16.9 か月であった。術前後における平均 logMAR 視力は術前で 1.96 ± 0.50 、術後最終診察時で 0.49 ± 0.43 であった。移植前後の平均角膜内皮細胞数は術前 2826.0 ± 335.7 cells/mm² から最終診察時 863.5 ± 501.7 cells/mm² と減少し、平均減少率は 68.2% であった。平均グラフト径は 8.2 ± 0.21 mm であった。術後合併症としては移植直後の移植片偏位を 3 眼 (60%) に認めただものの、1 回の空気再注入により全例復位し、再 DSAEK や全層角膜移植に至る症例は無かった。そして復位後は、APRK 後に生じやすい角膜後面不整症例における DSAEK 術後の移植角膜の動態から、一度接着した移植角膜は角膜内皮細胞のポンプ機能により長期間に渡り徐々に接着が密になっていくことを確認した。

これまで水疱性角膜症に対する唯一の治療法は全層角膜移植しかなく、しかも APRK 後に生じた症例において、その手術成績は不良であることが知られていたが、近年の角膜パーツ移植の流れによって水疱性角膜症に対しても全層角膜移植術に代わって角膜内皮移植術が行われるようになってきた。本臨床研究によって APRK 後の DSAEK においても通常より多い内皮細胞減少率や術直後の移植片偏位は引き起こしたものの、再移植には至ることなく視力回復を認め、全層角膜移植術に取って代わる新しい手術治療になり得ることを初めて明らかにした臨床的に意義のある論文である。

よって、本論文は博士 (医学) の学位を授与するに値するものと判定した。